



崑山紀談

五六

113
561
3



113
561
3

常山紀談卷之五目次



勝頼の首穿鑿の事

秀吉勝頼は滅亡を惜まらざりし事

信玄の館跡を信長公見らばし事

勝頼天目山より最後の事

禅僧廣嚴院勝頼の屍を葬る事

信忠慧林寺を焼く事

東照宮依田信蕃を助けし事

武田信綱誅戮の事

戸田半右衛門山口小弁佐々清藏功名の事

小山田信茂誅戮の事

天正十五年二月
花房仙次郎氏寄贈

馬場美濃々女召出さるる事

辻弥兵衛が事

明智光秀信長公を弑す事

秀吉備中にて光秀が書を取らる事

秀吉西國の米を買らる事

光秀居城を築く事 附 幸崎の松が事

森蘭丸才敏の事

光秀反状が事

秀吉浮田を欺きて上洛の事

黒田孝隆思慮が事

池田家の使者筒井順慶を試す事

明智秀俊湖水を渡りて坂本城小入る事

東照宮和泉國堺より御帰國の事

小寺黒田始末の事

井口兄弟武勇が事

吉田六之助首供養の事

生田木屋之丞武功の事

備前國福岡城合戦福井小次郎歌を遺りて討死の事

再福岡合戦茶師寺額田片岡三士討死が事

常山紀談卷之五

備前國 湯浅新兵衛元楨輯録

○勝頼天目山に落ちし時瀧川一益攻入て落人ども討せり猪杉
 の首をやりし事誰といふ事をあはれ小溝の中へ棄て
 らふ百姓も溝れあてて必平伏し礼をしつゝお通といふ
 たりとぞと問ハバらの溝れ中へ屋形の跡首れありと
 といふ所をバとて首どもとりおれ信忠勝頼乃首をこら
 置先瀧川義大夫を呼く汝がとりし首ハいづれぞと問
 うふ是なりとておれ此ハ土屋總藏昌惟が首なり伊東
 伊右衛門といふ者なりとみ出て猪頼の首を見て此こそ伊右衛
 門が取しと申せしといふと問はれしと斬口小葉しつゝ馬の栗

て関東先陣と云々人々東國ハ平かよふと云ふ事あり
かたし悔まじきあり

○勝頼亡て後信長信玄の館を足んとて馬を乗入んとせしめ
し馬進まざりしハ引退されたり 東照宮ハ程程々

甲州を治えさせし時信玄の館ハ跡少後の時彼門外
して馬下り下させきりし

○勝頼滅亡天目山よその甲陽軍鑑ハ切死し没せし
よりのせきり甲州ハ士民乃し供つてハ異なり鶴瀬も

勝頼ハ背し天目山ハ一揆所より
起りて々々百姓の敵ハ従ひ婦人ども臥し旁此人
家ハ焚れしをばせし出入り口をぬきせ火をけ

られり小高を所より上りて武田の家代々持傳へらるり
櫛毎とて物の具を信勝に著せしめし土屋總藏肩入此
役を志しりして勝頼ヲ薙刀を横し一揆ハ向られ
しを總藏屋形ハ新羅三郎より二十八代弓箭の家を
グセきりし今ハ此ハ及むるも一揆をりし所首を
きりし事口惜しと誅されたり物此具ぬき
總藏ハ錯せし終らるり相従へる人々皆互に
刺ちて勝頼供ししを總藏と僧の麟岳と云ふ
やれしが皆事よく終りしを足りて後總藏自害しけ
まは麟岳刀を口より貫き死しとなりはれば
甲陽軍鑑天目山の事より彈正乃筆記ハ此後此人

誤して傳へてまゝにさへ

○勝頼父子は屍田野にありしを信長を恐るゝて慧林寺の僧を
始とて斂る人なり田野の西北四里計に中山といふ所の洞
家の禪僧廣嚴院来りて勝頼夫婦信勝已下の屍をくま
葬る其後東照宮甲州を清くし一寺を建立有て景
徳院と號し田地を寄附あり小室山内膳友信が弟此僧あり
しを住持此僧となりきりたり

○勝頼亡て後武田家そ崇りて慧林寺に前將軍義昭公乃
使大和淡路守三井寺の上福院佐々木兼禎三人かくる
所ありりれば早く出れんと信忠下知せし事二度及
づも出され信忠怒て累世の且越勝頼をバ少の間も境内に

とめぬ其遺骨をとり斂りて詮らる者をかゝる
と津田次郎信治長谷川興次郎等を寺をとりま
てはぐさる三人ハやく逃りぬ僧徒皆山門の樓より
とりのりて其下は燒草を積りて火をかけきりて快川を
始とて坐して合掌して焚死を其餘のめきはるんで燒
死する者寶泉寺に雪峯東光寺に藍田長禪寺に高山寺に
童よひて八十人なり

又禪僧の後り傳へて快川濃州に有る時信長招待
されども肯ん今川の家より甚今川家を輔佐し
まされバ信長少くされし甲州に往て慧林寺に住持
きり信玄は死を涼くかくるまは信長愈怒てさへ

いさぐりすせしれい快川の方より泄されバ信長怒
きえりひられが武田の亡るを遂に焚殺はれしとあり
又其時楼下に滄先をそりてけりしとありしに
快川弟子の南華に法れ絶あん事とありしをいとも逃
びしとありしども樓より飛て死しと云いしは南華
飛きりしと群し士卒の鎗ぶすぬを他しとあり
者ども滄をぬせりしは南華をすりしを以て
後豊後月溪寺にけりしとあり又ついで飛しとあり
十六人有りと之ども其名伝しとありしや

○天正十年三月 東照宮江尻に海軍出され成瀬吉右衛門、
正一を以て田中城をとりける依田右衛門佐信蕃に降参候

すくえられ武田の旧臣悉背て滅亡近しとありしとて城を出
と仰おしとありし依田後ひきし武田の長臣共の書簡
を得く虚実を定むる旨をゆく其後先年遠州二股に
城よりゆりもいへバ大久保忠世に城を渡さばとせり
とあり 東照宮をかりしとて穴山梅雪が書簡を送らせり
信蕃こゝに於て城を忍せし渡りしとありバ降参せば信州の本領
を以て行くべきに仰おされし依田兼右勝頼に存亡を審し
兼らざる間ハ仰を承りしとありて信州佐久郡草田に赴
けり信蕃既亡て伝長今度信長に二心をもちしとありし
武名ある老ハ諸將召かめべらばと下知し居りし居り
者を搜し出して死罪し行人とれり 東照宮此事をいし

やせきすひ信蕃を市川の陣に召まじ密旨をさかり主後
六人遠州飼東郡二股此奥小川といふ所かく所せしむ
かり其信仁徳よりて人らちまじきすけさせしむる

○天正十年三月武田道遠軒信綱降参し其を信忠本林武藏
守長可より下志し其後されり長可各務兵庫元正を
使し武前采女を添はり信綱刀を膝下置ておれど
各務武藏に向て武藏ちが愛する馬の候たぐさみよんと
やらんやとど庭に出るや元正二尺六寸ある雲次の刀
こそ一太刀斬きりしに信綱小股指を抽くを采女ついで
切伏しり小姓河野といふ者信綱の刀を持居たりしが即抽て
采女を切兩士遂に河野をも討つめり元正鎗を合せ首

をとり本北一こや高遠の城攻もさすより觀見て群
る其中へ飛入倒まじ起あがりておれり切あひ首をとり
くろが雞尾の棒はけり物さしりしをとり有きぬを
信忠見て難し問長可しが家の士各務兵庫とやりのたり
としバ誠し今日れ見物あまといを控しと我

○高遠の城にて戸田半右衛門重政一番かけ入射赤丸より金の
戻竹ろ出り戸張隠のす戸衝木よめて通し侍ど尻居し倒
る其間し信忠ス小姓山口小弁佐々清流ふと越てかけ入
りり戸田後一人に信忠をわきまがめた武功よてハちろ指
物の門木戸はけりおと心つくるハちろおちり敵をたてか
る射外の志とならぬのありり猪まじ武勇此人ハ別の事

よとりのひかり半右衛門後武藏守と称し関原にて討死なり信
長後小惑状をいへりし時先小弁よりづり國久の刀を
あつて次に佐る長光此脇指をあつて汝が武功ハ滅し大功地
内藏助が後子あればと詞をかけらる二条にて明智信忠を攻
る時清彦小辨に向ひまをりて死んハ屍の上此恥なるべし
とて打て出一人つ教を斬伏其屍を引入物此具よりてお忘
又切ら出討死せしとなると共十六歳容貌世を超て美し
かりけるが面は血を濺ぎ髪は乱まるとを足る人跡は惜しあは
し小辨ハ伏見此賤記者れ子あれども美少年とて呼出され
るなり

○小山田兵衛尉信茂ハ武田累世の長臣なりしに勝頼に叛き降

系して善光寺に有しを信忠堀尾茂助に下知し置くころせ
とちを則武三大夫を討手とて士一人そと甲曹を送り一
礼せん時刺殺せし事なり三大夫善光寺に赴き甲曹を贈
りまらるすし由ひひられ小山田とて一礼せしれども則武討た
さしりたなりや有て則武志づくに武田の家士大将として
数世重恩此身今夜主君に叛き不義此由いふ左討手よ糸は
たら向ひまをりし小山田聞て口をくも討らるるころ
首を刎らるるころも則武は動くは小山田刀をさるけ
きやうでいひとくど其時則武立あがりて首を斬きりり
○勝頼亡て後馬場美濃氏房が女召出さるべしとて甲州の郡
代鳥井彦右衛門元忠に仰せられし尋ねさるるころ

信長の宿せしれ一本能寺をとりかゝむ森蘭丸長定は
事ぞ物ささぐりごとく白たかびれ上は浅黄かれ子の
小袖をそをり立ちて見し壁の外は水色乃旗足ゆ信長
敵ハ誰と向ふに蘭丸明智よていとやしもとてぬ箕浦大
藏古川九兵衛天野源右衛門等大庭よごれ入信長白さひ
と人物を著弓持て射らまじ小弦をれとり地懸脂のかびり
急々七七八歳計の女房十文字此鎗を拵来りて信長
わつとり志をり防まじ内よつと入て障子をひき立れど
も燭臺のいよごみ火は信長れかけらたりとて見えて
天聖鎗をとり刺通に蘭丸弟れ坊九十七歳力九十六歳
かりしが切て出討死し隙は内より火をかけ灰燼とな

アツシヨリ

○明智信長を弑す時秀吉ハ備中よて毛利家小向陣せし
が秀吉所々志のびれ者を置まじ小備中庭瀬よて怪
げあ飛脚の者松生よりきり秀吉其書を披たんとり
信長を討とるバ秀吉必敗れしとて秀吉を追撃まじり
毛利家へいひ送るまありり此書毛利家よてバいりか
る謀らむたも志をりり秀吉の慮浅くどと人の危
し又高松此城ハ忠やまじ攻落さべた水攻めりて日を
経しハ信長常は大功の速に成を思ぬし心の心は然
察してれをたるといり

○秀吉備中よ陣して毛利と和平せん事を計り密よめりて

を運運西國西國の米を價價を費費く買買まうまうるる城米城米を出出して賣賣る
者者多多し小早川隆景一人固固く制制してううらせせば信長弒弒せせら
ままささく秀吉と毛利家毛利家ををぶぶれれああるるべべりりしし小兵糧小兵糧乃乃ゆゆら
たたららしし故終故終と和平和平と及及べべり
○明智江州坂本坂本の城城を築築く時三浦三浦といいふ者者
彼彼よりかきかきひひけけききややままのの味味

光秀光秀日記日記

磯山磯山ははくくええととくくるる松村松村

又光秀丹波龜山丹波龜山より愛宕愛宕の山山にに移移をかかまま此山
を周山周山と名名く自自ら武王武王小比小比信長信長を殷殷比比紂王紂王とたたららるる
心後心後よりよりつれつれととりりと人人のの心心ををりり又志賀唐崎志賀唐崎乃乃松松のの川川に

比比より枯枯ららりりしし松松光秀植植つつぎぎて今今此此松松あり光秀光秀より先
了了歌歌

これああららてて惟惟ららハハうう急急むむひひろろのの松松ららろろししくくああけ
志志加加るる此此浦浦ううらら

一説一説青蓮院宮尊朝尊朝法親王法親王此此幸崎幸崎の松松此此記記してして見見れ
とと大津大津の城主城主新庄駿河守直頼直頼舎弟舎弟松菴松菴東玉東玉雜齋雜齋
直壽直壽此此雜齋雜齋天正十九年卯の秋秋植植られられしし由由其其時時ののううらら
おおののつつらら子子代代もも終終ぬぬへへ辛辛崎崎此此ままののううららひひろろく
みみそそたたななりりせせらら

○本本林林蘭丸蘭丸ハハ三左衛門三左衛門可成可成子子よよて信長信長寵愛寵愛厚厚しし十六歳十六歳を

又信長ある時酒宴して七盃入れさうづたをりて光秀こまひ
らう光秀必ひもようづと辞しやせバ信長脇指を抽出白刃
をのせむら酒をねむだたうと怒らまうらバ酒のこてりり
其後稲葉伊豫守あ人を明智多くら禄をうくよび出勢
しを稲葉末までもりどけ信長めせと下知せられ
をも肯り信長怒て明智が髪を挿しひきこふせてせめら
光秀國を賜りへども身の為に改まことなく士を養ふを辭
一とす中答るるバ信長怒たうさてやまらり 東照
宮御上京れ時光秀の池走の事と命を種々饗礼の設
々々信長鷹野の時立ちより見て肉は臭く草鞋のく
ふみちうされたり光秀又新用急し如く備中へ出陣せし

と下知せられらバ光秀忍うて叛しといたりはまハ信長の
暴ちりり論を待び光秀土地を畧せん為老母を質し
してこぼしめ不孝を信長の賞せられし思共惡逆此
相あ終を全せしと理あり

○光秀信長を弑す時秀吉備中より引返さる時備前乃浮
田八郎秀家幼少たれども長臣老將の面をいうたる謀りや料
アゴくれば先使を岡山れ城より一刻もそく池上り吊
軍を志し岡山をわ謀る云せられ浮田ハりより光
秀工心を通下るまバ秀吉の歸路をふちぐらやいせん
といふまかく告来まバさバ城中で討とる願ふ如の
幸なりとひさうに悦らうて其謀を相議し秀吉六月七

せしむるんと人々をなすり池田紀伊守其臣日置楮右衛門
土倉四郎兵衛丹羽山城三人を使とて順慶のめくやら
きく三人兼て順慶の明智とせざ刺殺せしむるや
紀州公いやはと汝等死せば片手を折まてしむるや
制せしむるや三人かきめて順慶と軍せんといくもめ
おひ討死すべしは三人も討死すべしといひ三人をめて
録これ味方のかき戸へ順慶をうちしむるや光秀必敗小
なりとて順慶がめくやとゆく順慶出あひくいうや光秀
が不義とくみまじりて信長此吊軍せんといふも偽
あゝぬ体なれば三人悦て帰るさこそ山城今日順慶いふとい
んは刺殺さんと思ひく坐中をまるといふやいふかえと十

六七兼むるやちる男此順慶が刀持て居たりしむるや
只者なるとは順慶の飛くやなるとは頭二つ切りつとく
見えるとは強りなれば日置も土倉もされば我おもさるひつ
事よといひたりか此小姓ハ牧野兵太とて武者修行して
世よとて剛の者となりたりと

○光秀信長を弑して安土の城を攻むるや左馬助秀俊とせしむ
せく山崎にお向ひ秀吉と戦て敗北せり秀俊安土を出て光
秀を救んと京をけしむるや光秀討まると
写るや坂本の城に入んと粟津を北へ大津をさしてしむる
秀吉此先陣堀久太郎秀政とあひたり秀俊小勢あられど
うら破らむとあむさ敵とあさぐれつ湖水と馬をうち入れ

およぐせられバ秀吉の軍兵ども汀に並居て溺らんむさばを
見よと笑ひたり秀俊ハ白練の雲龍を狩野永徳のかけせ
し羽織を着二此谷といふ曹を名大鹿毛と名づけし馬
に乗年久しく坂本に有て大津より唐崎までの遠浅ハよく
走りしをききやすく唐崎をばり乗つけひら松の下より
馬のハ息あひれ茶を飼返くる敵を見て居りしが又馬
乗坂本に入ると時十王堂の前より馬より走りし網をめて
堂に繫だ矢立此硯より出り明智左馬助湖水をわさせ
馬よりとれしききて走りしが結つけ坂本此城より光
秀の妻子と天守より安土より光秀が奪とり来し不
動國行二字國俊の刀茶研藤口郎の小脇差なる柴の肩

衝乙洗茶の釜ちどりの名物の器を唐織の肩衣に包そ
天守より投おろし其後女童を刺殺し火をかけて自害せ
し二の谷此曹ハ羽織と黄金百両添て坂本此西教寺に送り
まかりほし山中山城守長俊が孫作右衛門友俊曹をのぞみ
乞て得しりしが経絶て紀伊の士宇佐美造酒助孝定が許し
傳りりぬ羽折ハ坊方をあはれ馬ハ毎双の駿足し秀吉志津
嶽の軍に此馬に乗まじりたり

○信長弒せし時 東照宮ハ泉州堺におろししりし小幡
よてかゝる乱まじりしはと三河へいりしりしせきまじり
と人くいろを失へり 東照宮素より地理をきりしめこれ
河州飯森の文ハ要害地なれば其地をもちて軍にゆくと仰

ありて森口ヨリ退せし時本多忠勝京都ノ御使ノ事
々々が事ごとく變を以て引返して来て敵大勢を以らんや
津歸國御使と申さんと申しを聞て召案内者ハハ口を
敵道を要らんハ必定なりやと討まんハ口を以らんや
と仰るる處小信長より馳走して長谷川竹
丸當國の交野郡津田乃らり信長の恩を蒙る者
此ら等々ハバ言ふ事勢ハと申し宇津越を以て山
城の相樂郡を過木津川をわたりそれより宇治橋の上
一里計東の瀬を涉り江州信樂ノ出るまより伊賀比上野
鹿伏免越を伊勢比白子よりして船を召まじゆるんと定
られし忠勝蜻蛉斬と名づけ一鎗を挽げ其邊の百姓を

お具一此殿の案内申せといひてこれより道々此村より
かくもさうりけれバ津田より案内者来りぬ其日山
樂郡山田村よりあつせし心より心を以て一人と
あつて警衛一なる穴山梅雪とこれより後ひたり
ひたり
宇治より木幡越を江州高島ノ至り濃州ノ赴き甲州
一泊るべき旨を以てひき別まじ一揆の爲に山城に綴
喜郡より殺されしと我
其翌日本津川より退き柴船二艘より志保から
んとりて肯されバぬい奴ら切て棄んとりて恐る
のせ奉るやがて涉りて二艘の船皆打りて

棄^クり其^{ソノ}けの日^{イツキ}一揆^{イチキ}石原村^{イシハラ}ありて待^{マテ}りけり大^{オホ}
和^トり後^{シノ}ひまり吉川^{ヨシカハ}善兵衛^{シヅノ}其^{ソノ}子^{シメノ}主馬助^{シメノ}柏^{カハ}の木^キを馬^{ウマ}
さしめ先^{サキ}がけし追^{オウ}て柏^{カハ}を森^イの紋^{モン}にせよ仰^{オホセ}
て宇治川^{ウヂガハ}よりせよ船^{フネ}なり榊^{ササキ}原^{ハラ}佐^サ多^タつ
を舟^{フネ}入^イ瀬^セぶらして打^チつ酒井^{サカキ}忠次^{タツツ}船^{フネ}一艘^{サウ}をわづし
て渡^{ワタ}りし雑^{ザツ}卒^{ソツ}いしまで皆^{ミナ}こころを侍^エり江州^{ヨウ}
信樂^{シノ}まで八^{ハチ}嶮^ク路^ロありし警^{ケイ}衛^{エイ}いし後^{シノ}へり人^{オホ}多く一^{イツ}揆^キ
をさしめりもたう多羅^{タラ}尾^ヲ四^シ郎^{ロウ}名^ナ衛^{エイ}光^{ミツ}敏^{トシ}八^{ハチ}世^ヨ信^{シノ}樂^{ラク}を領^{レウ}
りしが其^{ソノ}子^コ長^{チカ}兵^{ヘイ}衛^{エイ}迎^{ムカ}へり人^{ヒト}心^{ココロ}をわづしと人^{ヒト}
恐^{オソ}ろくそし忠^{タカ}勝^{カツ}いやく光^{ミツ}敏^{トシ}敵^{テキ}すもわづし彼^カが家^イに入^イせ

中^{ナカ}よりいづとものがりまうど一向^{イツウ}入^イせ給^{タマ}へとやせは比^ヒ百^{ヒャク}尤^{ユウ}あり
として立^{タチ}つてせうつし清^{シヨウ}めてたりを設^セけ人^{ヒト}の勞^{ラウ}を忘^{ワス}れし
又^{マタ}忠^{タカ}勝^{カツ}此^{コノ}もた多^{タラ}羅^ラ尾^ヲ二^ニ心^{シン}有^{アリ}と又^{マタ}バこころして刺^{サシ}殺^{コロ}せしべし
としひたるお立^{タチ}つてせよともしもいひたる
五日^{イツノヒ}は高^{タカ}見^{ミン}嶺^{ミネ}を打^チ越^コえたり侍^シ供^{トモ}候^{コウ}は服^{ハツ}部^ト半^{ハン}藏^{ゾウ}正^{マサ}
成^{ナリ}はめし伊^イ州^{シュウ}はまの人も忠^{タカ}勝^{カツ}下^カ知^チし伊^イ賀^カの案^{アン}内^{ナイ}
者^{モノ}をりたりと國^{クニ}士^シありて警^{ケイ}衛^{エイ}なりて上^{カミ}拓^{ツク}植^ゲ
より三^{サン}里^リ半^{ハン}村^{ムラ}鹿^カ伏^{フツ}免^{エン}越^コえし深山^{シノガハ}を越^コえり六^{ロク}日^{ニチ}
小白^{シロコ}子の浦^{ウラ}よりせよしひて長^{チカ}谷^ヤ川^{カハ}竹^{タケ}丸^{マル}秀^{ヒデ}一^{イツ}後^{コト}藤^{フジ}を始^{ハジ}め
して和^ワ州^{シュウ}山^{サン}州^{シュウ}伊^イ州^{シュウ}の士^シは侍^シ暇^{イダ}ありし時^{トキ}を以^モて濱^{ハマ}松^{マツ}
を築^キりて仰^{オホ}を蒙^{モウ}りて三^{サン}河^{カハ}より

たつて帰らせまじりしひめ伊賀ハ去年九月信雄攻入て打奪
がられし比途かきし者を救出し殺害を専とせし作
らば國士ども三河より来て侍恩を慕ひし人々多かりし
らば其徒類皆敬言固しなりきりたりやがて明智を追討
此為侍軍を出されし伊賀の國士どもはつらかりはしめて
参りしを多くハ大番に入らせし恩賞ありあつたりきり
○黒田美濃守職隆と後宗圓と備前國福岡此人なりしが播
磨の小寺藤兵衛政職仕へし子官兵衛孝隆と後如水と共小
功名ありて用られし播州ハ其比所より人々地を據りて
守り軍せしが小寺ハ五著より有て姫路より小城をかまへ黒
田父子より有て秀吉ふたのこしく信長の旗下より屬し孝

隆の子長政其比ハ松千代といひしを人質ありし秀吉此
居城近江の長濱に置り此比毛利家ハ兵勢強かりしハ
小寺約を變せんといひ孝隆此ハ然るをきり信長物あ
らき人なれども一旦天下より旗を上げらまらん其未だ
先時の宜しきに隨ふべし松千代は棄るを悲しくかくし
まじ非むといひはえきり小寺岡入り孝隆父宗圓小父
子とも誅せられぬべし密謀を告宗因物たつてし士五
六人呼りしめ所存を問ひ官兵衛五著小らまらざるハ危
かきしといひ孝隆はれは諫ハたされども事もんじり
て姫路小寺とてこもらんハ君より弓をひく非むや五著小
赴きて力を盡し奉公かなはむと自ら害せん其後人々

心を合せ父此序事きのみよかき由決断せしむるハ
人々父子か一隔られむハいふべき只病として五著の奴原
は使をめて媚諂ひ欺くは志くばり付み来らざカ
たり其後一戦を遂て五著を打破るばり罪あつて討ん
とする悪逆此人天の咎たつらんやと口々いへども孝隆
各存むる昔ハ縁よまのころりあきども今病といはんは実
とハ度入ド必主君に叛くと人小謀られんも士の志は此
君小保くせひ入さる忠の心くたつらんハ運此きハ先
ちまバカカたつらん一人誅せしむるもいふおせん
此婚路をば取まは天下の安危歲月を控むて定
るばりとしてささる色れ見えれば宗圓家の恥を思ひ

て身をするむとさひ定む事士の志なりとて五著小おれて
事かあつたバ自殺せよとれまハ心安くさひへ君の志を
がさもわき叛くべとさひは孝隆打つらひささ
バとく座を立たんと只今召きつれての仰を遺言よ
あつたやり五著して難をのがささ戸もばハ其の時人
五著の城を枕せんと誓ひたり宗圓官兵衛ハ皮兵衛城
せよ人ハ人の志をせよと下知せられハ孝隆五著小赴
々宗圓又ねくり子たつらも取つたまなり先づらべた
親の留アとて子に死にいとわそ口をハ神はさども君
恩浅くさハ人此存るまなり今讒言を信せしむハ
そ怒り々々孝隆をやらばりて引らり謀叛し命ハ

をうた物ぞとあるハ父の道は非む仇となりて身を殺む
と恥を志すささたりて死してさめく泣くもささる酒
五者よてきざりて死ん今姓路小弓をひく設かき酒
りりて時々舞うてひて目をさすといひしとぞ孝隆ハ
五者ふれく心なくだた人のゆふ使しく求めまされ
者ありとく食し志めやくに語りて打とけし体たれど
いらはくろくも心の外はうたれぬ幸ハあらしとぞ
いひあり又此を救く黒田父子ハ謀きくまらた者あてよ
き士らう有城小のり用意せん間小官兵衛を以て欺く
だたも計りてとて姫路の松をす宗圓金剛は孫まハ
せく打とけし体たまばはくハ別乃事もあるじとて

此時攝州荒木撰津守村重ハ毛利ノ属一信長と戦ひ利
らして有岡の城はひきこりて此由小寺聞て孝隆をよ
びて日れ毛利はくさむたハ内々荒木といひかたりて
故たり今毛利はくさむたハ内々荒木といひかたりて
はくさむたも此はくさむたをせんは表裏者といれんも
口をくさむたハく有岡のゆく荒木を誘くハ内々
秀吉ノ謀りて信長と荒木和平をとり行ふなり攝州
信長は従がられも真ノ心をひくぐりて信長は従ふべ
といはば孝隆はて信長と荒木と和平ハ思ひよりもいれ
荒木はく信長は背きまはくはく其言を信ぜしべさ
参りてりともいづ事たりん然ども辞しやせば勇か

たに似きりとして有岡一遊く路難路の立よりて父子對面
一有岡小六ハ必首をたぬべとて囚とせしむる二つの
中一は五著の死んより有岡一遊死ハ信長も又世
のかされともありいべとて色を宗因足て涙もむ
せびもむ物をもいざりて誠小困厄の至極か
まてい名よかくて義をたふ友なるとして送
りて孝隆有岡一遊小寺兼て村重小密一毛利
小一味とて黒田父子人質の松千代を信長一置
きればか父ハ織田一内通此志らと告あつてせしむる
有岡の本丸よよび入生どりて牢よとみより五著一此
由聞えりは小寺のりて齒かきをち荒木が狼籍

の次第遺恨深し然るも此上ハ信長小一味のりて易
く毛利一興一官兵衛を引くる謀や有べたといふは宗
圓怒り皮を衛生どりの成りハ是非の論なり一年を
身お子を失ひいふハ滅の力あら次子なり然るに皮を
とるにんすいそれたれども先松千代信長一出ハ
事ハ君も又臣父子と相計りて知てい今度官兵衛を有
岡一遊捕へしハ其本ら横さはのふさひたりねとられふ
その人おちを棄てくおとめ者なきすくばさハ逆あら
どや只順道小隨て天此冥見を待とるべとれわたり
度々の軍小信小寺お家の危難を救ひ今テ齡かつたれ
と切つ長子おすてはまハ口をくはへとも首をくぐり

とも毛利一昧せよとの仰をバ得兼らざるとて刀を抽き誓う
々々バ使も言たうて歸りたり宗圓が士ども五番を攻破らん
とつども用ひば村重心あふバいづべりの五番を攻めバ村
重も官兵衛を殺害せよとあつぬさほめてられしからん
と思て官兵衛が女房をバ潜小此比引とり置しりて殺すべ
村重ハ小寺小寺のされく孝隆を生とりたまふに巴がめら
少も非もバいづともを並りかかく信長有圖を攻ふ及びて
毛利家の後巻もせされバ城落しりりて孝隆ハ牢に中り
らされて有るをよ栗山備後善助討く有圖よゆたて志のび
く商家をかこらひ牢のほれ沼より姫路の事どもかこり
本なめて案内をとりこれバ牢よ走りて足さバ番人も

落しせきり此ハと驚た且悦て善助すて重く斧して次を
破り引きてこれども三年居かみ其上に濕瘡を病く起す
らういばかこちある牢中の人をせりかたおしせく城を出
寄手の陣のゆきこけく姫路小歸り事を得り秀吉播州小
攻入る及て小寺ハ但馬のちり思田父子危難を脱するを
得く孝隆に宗粟郡を賜り姫路を秀吉の城と以後如水
と称して智謀をこく秀吉此功臣第一と聞えり
これ孝隆なり

○黒田孝隆播州にて秀吉の命を待長北坪といふ城を攻落し
井口猪之介三宅藤十郎其城を預け孝隆ハ秀吉の先
陳し度小其城より逐落し者ども一族を催し其夜攻し

せりり井口三宅人も少く攻破さく普請もいさぶせむとぞ
守まごご殿いさぶ遠くハ由りせむとハド切めけてよあり
後巻の事ハ返べいと云合せ三宅ハ百二十人計とて搦手有
し人数を残り二十人計を連圍を出る敵利をばく攻入せ
て井口ハ大手少く防戦しが翌朝辰の刻後巻の旗先見ゆ
比薙刀少く片股をたふれ落され石垣まきより居しとぞも
敵恐まごご近付とて最後ハ大音あげ此城乃大将井口楮之介
ぞ首それとく自害しきり孫十郎ハ後三宅若狭とて武名
あり楮之介と三人の弟に六大夫甚十郎典一之助といふ六
大夫ハ播州北条此構をもちく討死しきりあり時孝隆此士
罪ありとて討手を向らふに却て討つと切く兄弟三人町と出

大あつ屋よなをりきり甚十郎見てあんとつて孝隆
あつされきりふ再三と及くれハけくゆきされり
甚十郎其処にゆくと忽門の潜戸をひき放し楯小とりて
飛り入り戸を以て二人を打伏せ一人ハ切殺し打倒し
二人も切と首三つとりて馬に乗二町計帰る処に罪科人の
従者主人此首を見て鎗少く甚十郎が馬上を目がけ飛
かりて突けられたる其者を切てさくこれとも痛手
よて馬より落少時ありて獲生しを戸板のせま
孝隆膝を枕しけせむハめ何と問ふ小如此といひ
ひく終まり兄弟三人皆こが為し死し事報もつて
なりとて孝隆其父典二右衛門が宅より自往り吊り典一

之助七八歳なるを呼出さる 既に九つは旅々比三人の兄々
勇氣ゆく一と者ありれども人の生質ハ計がこまれば試
んと思ひく磔を見つるやと向ふに足燈と答ふ今夜八月明
ありその所の所此磔木の下にゆきまを立くゆんやとい
らるるに兼はとて自沖幣切切竹につけくゆんやとい
典一拵好く立んとすふ磔木動くを見て死きぬり留成
怖くくせんとして木への驚く磔木より飛下り逃
る成典一きとちわくた次第なりけがすまを逃かすせ
ん方あく宮のりり一内へ入戸をきりまはいつまで待てもお
をさるん物をと叫ぶさゆくまをいへ名をいへぬれば
殿の仰まておのの為来りてせよとせよと唯子の片袖を

證據よりとりくゆきまよといやより帰るぬ朝鮮よ
竹も木もあらぬ廣野の一筋のそこ窪く切通く似く其
向ふ処大山乃林鹿よて曲尺はぬ大穴を穿ち射手を
置くゆかる日本人らま射殺され屍お重まり山に
の敵多少をきりげればすむ者なり井口は後者山崎喜兵
衛見てまらん馬を扣て待れぬといひすて走りて井口を
馬より下りて走り入山崎先射手三人を討ち其首を持
大音らげく名をきり井口攻入追ちて井口を討ち
兵助といひたり此賞美し朱柄の鎗をゆきされぬとす
卒尔はゆが一日小首七つありて朱柄ハゆ
ささく傳へてんと人々ゆきま延りて其後

井口一日二首セツ山崎も首六ツやりしバ朱柄を兵助しゆ
されしり晩年ニ村田出羽吉次と称しあり

○別所家少首供養し人有と孝隆すて秦桐若首三
十一とありし小傍むねハ死しり吉田六之介正利供
忠長も居しといひし正利首数二十七とありしとて辞し
きりたり孝隆小氣ちる男なり今年三十一歳なり此後首
中しちりしとや先供養して後し其數を合せしとて朱石
の供養し播州青山の南小塚を築きしり後所
此合戦朝鮮乃軍までしりし首五十小及べし後壹
岐といふ

○天正五年黒田孝隆播州佐用の城を攻る時生田木屋之介夜

中よ忍びく城際小近づきしり懐中の小鋸をりて屏柱の
根を切目むしりしり翌日城攻小か柱小鈎繩を付く
引倒し先がけし城入りしり木屋之介り隅田小介と
し日向國隅田刑部少輔が嫡子なり十六歳の時傍輩を討
て出奔し播州しり孝隆の士井上九郎右衛門を頼しけ
る小留置しり對面せしり其夜隣家し人を殺し
取籠しり者あり夫をかりめ出しり付即時孝隆し
申てそれよと奉公しり攝州生田の城して高名あり
されしり生田木屋之介と姓名をきりしり是れ高
名をちりしり顯さん為とくや

○文明十五年十二月十二日備前福岡の戦り

備前ハハル赤松氏世々領せし嘉吉元年赤松満祐
滅亡の後備前も赤松相摸守教之小賜りり教之が代
官小鴨大和守備前1有應仁の乱れ後備前津高郡
金川村王松の城主松田左近将監元成を細川勝元ね
かろひひへ元成兵をあつめ小鴨を攻んとす
より赤松が家人ちをくよなり者元成よみ
小鴨を攻めぬ赤松兵部少輔政則元成を賞して伊福
の郷に置ぬ山名宗全細川勝元共ニ病死の後京都を少
志のうちれども諸國ハ弥大ニ乱れ松田が一族ども備前
西郡の中りし押領して政則を將軍家より功を賞せし
も播磨備前美作を返し賜りぬ山名右衛門督政豊

こゝを怒り文明十二年九月京都を出く但馬の國
池下るかまきバ政則も播磨に池つづく此ついで備前の
松田が怒り攻めりし所を止めざるをせり元成
此由を兵糧用之の為小志をあらざるをせり伊
福のついでハ軍功より賜りし處をればは
はるこれハ事ト托しこれを打亡人の謀たるん
とて金川の城を構ふ此城を麓ハ大川流す峯高く
四方峻く要害と地ありはれども後卷のよだく
を築り備後國山名俊豊小告て備前を切とりや
とてとひくは俊豊を悦べり政則備前に赴
き松田がわく巴が地とる所をせりれば

文明十五年九月山名も備後の尾道を出て同国分
寺よ忌三千餘をかり催し十月七日備前の國小打入
うば松田が一族相あつり邑久郡福岡北城の西北乃山
陣よりまると福岡の城ハ東西大川流ま中ノ嶋山
の城上據て改則乃ち後代浦上喜三郎則國を始と
して二千餘人たて籠り川上北津と長船右京亮ホ
野伏を添て陳ざりしり十月廿日ねよせて合戦あり
浦上が家人の榎村与三兵衛回又四郎とて兄弟つりそ
よりあゝ元成の奉公のりる因ありしりハ密よか
ひく十月廿三日夜半風をけし使の陣屋に火をか
くしりあゝ内通よ力を得くやとて攻よせたりし城

中まひりし支戦て追返して其後事あつて榎村兄弟
をか免とりこれを誅しぬ寄手其後相をりて十月
十三日小又富岡とりふ小山の兵を出て城よりも打て出
たふにお戦ふあも城兵も討く者多し
福井小次郎ハりと京都の人なりしが四家の比父源左衛
當國の在番れ時連下り城中よりあつて廿二歳あつ
が其日れ軍小父子の間を敵味方より隔られ父ハ城中小
入しりしとあひ走りしり尋ふふたれれば又城外に
あゝ寄手よ向く福井小次郎と名乗きてさほ様さ
切くあつりしりあゝ戦ひ疲まを家人肩小かけ
城中より入しりし浅手深手二十六所被りたれば終小死

ござ身ゆく人の後ふたがうて何んも本意小あはれ重て
 軍らへバ必討死せんと語りたれバ兩人聞てきれつゝも何
 く存るるぞと互小回しあひ討死せんと約束しけり今
 日次郎左馬打出ると唯今敵のまふわさるゝ首なり
 最後の對面して語りて鏡小向てあつこと笑ひしと
 我額田ハ岡本筑後守小向ひく子よては又三郎ハ一子あれ
 どそりしけて不便に存るまこと一所はりば必死をの
 りおべうらば宜しく計ひせられといひたまは心得あり
 中へしこらうらうらばま討死をせざりしとたり片岡ハ
 こと家来小向くこと首必敵ふとほるゝあまをさるゝ
 必死骸をひきよとて小よりをもて左の二腕を二重小

結バせまうらうら果しく是をさるゝ小死骸を求め得たり
 とうや

全二帙目 全五冊
 近刻出来申上

常山紀談卷之五終

五ノ廿九終

弘化三丙午年五月

備前岡山藩中

湯淺新兵衛 編輯

湯淺佐兵衛 藏板

江戸日本橋通壹町目

發行書林 須原屋茂兵衛

常山紀談卷之六目次

- 一 山崎合戦の時堀秀政室寺の山をとる事
- 一 森林寺政右衛門武名此事
- 一 則武二大夫功名の事
- 一 瀧川一益厩橋を退く事
- 一 光秀愛宕山にて連歌の事
- 一 幸田彦右衛門が母義死此事
- 一 志津が嶽合戦秀吉智謀の事
- 一 堀七郎兵衛見切の事
- 一 志津が嶽七本鎗此事
- 一 石川兵助戦死の事

- 一 佐久間盛政生捕り事 附 久右衛門安次源六郎実政事
- 一 尼子家の十勇士
- 一 信雄長を誅せし事
- 一 平松金次郎始末事
- 一 水野勝成高名并 行状の事
- 一 本多忠勝忠勇事 并 忠信の曹れ事
- 一 榊原康政秀吉を誅せし事を立られし事
- 一 初鹿傳右衛門が事
- 一 秀吉 東照宮の御陣へ戦書を賜りし事
- 一 東照宮 蟬江御公候の事
- 一 東照宮の御軍畧に依て 蟬江城降参の事

- 一 九鬼嘉隆 蟬江の湊に出る事
- 一 中村一氏 紀州の一揆を追拂ひし事
- 一 竹中重治の事
- 一 戦國武士功を譲りし事
- 一 羽柴勝雅 敵を免さし事

常山紀談卷之六

備前國 湯淺新兵衛元楨輯録

○山崎合戦の時堀久太郎秀政は士の子何ぞとて若明
 智がりし奉公して有しが先秀夜めいさぶぬぎさ肉
 室寺の山は兵をおしあぐらと謀りて父れり告
 やりくおひより敵味方とれ明日ハ一戦不及んるを
 歎きたる其書状を列秀政に見せしりたまは秀政夜半
 室寺の山ふたり上り隙一待ちせりたるをいさで知れ
 夜明がし明智が先子押寄しるを秀政山上より鉄
 炮を打ちけ不意に切くかえ追崩して一戦不利を得
 し

○山崎の合戦も明智が先陣と護國公の先陣と戦をいどむ
時侍大将森寺政右衛門忠勝真先かけ敵を追つ
森寺が馬印槍木笠あり一依明智が者を見てく槍木
笠の馬ぶき持せし大剛の者下知せしあまは目を
おどろくし姓名を乗らむと度く呼もりたるを秀
吉聞てくよの軍森寺が一人の武名をいげしとて柳の
故付しるたをりをあへられきり
○山崎の軍は堀尾帯刀吉晴の士則武三大夫首を取て吉
晴の前より来る吉晴ありひりありも出りし中よりと祠をか
けらむしは則武怒り首を捉てきりみよりかきし時
大将も目のくくあり物よは則武三大夫を取しとてよく

伊覧と罵る吉晴もあつと奴哉とりのまふ刀を抽
て斬られし由の星を削りし則武去一文字に敵に
中よかけ入又首を取帰る吉晴ハ亦則武ハ討死せんと
悔おのをもしつと又則武去まは大は悦んで汝をさした
ちえきり朝雲まは侮らふおひりよりもといし剛の
者ありしむき初めありむと道よそそあれ汝が二度乃
先がけ大きふすむしよと裁ぎられり
○天正十年瀧川左近お監一益と信長の命より関東北
管領とて諸將の質をとり上野乃厩橋ありり
六月七日信長弑せしむの变を告老臣ども事をかき
んとしども一益悪事千里とりし謗りり秘さるる事

能くどとて上州嶺の城主小幡上総介信真鷹巣の城
主鷹巣三河守信尚金山北城主由良佐徳と國繁鍛冶林
乃城主長尾但馬守顯長小股の城主濃川相模守義勝倉賀
野の城主倉賀野淡路守秀景白倉の城主白倉左衛門佐
藤園の城主内藤大和守秋宣安中の城主安中越前守三山の
城主高山遠江守重光五閑乃城主五閑刑部小泉の城主富
岡六郎四郎石倉の城主長根總殿次大戸の城主大戸民部
直光木部北條主木部宮内左利和田の城主和田右兵衛兼
佐業那波の城主那波對馬守宗元武州忍北條成田下総守
深谷北城主深谷左兵衛憲盛松山の城主上田又次郎政朝の
諸將を招き信長の変をつげ各乃人質を歸ししむる

上京して吊軍さくべき旨をかゝる諸將大に惑ふ此一大
事を告て人質を歸さるんといふいでう二心いづる人質
をせしむるを仰小後ふぐりと之を一益諸將の義心謝す
る不初もいづど小條の表裡定めて一益を討取て上野をお
し居べたあゝむけ方より打向ひ一軍せんものをとら
城は八回姓の表次郎忠往をちりし置一万計の兵を率て
神奈川小押出に
一説は北條家より人質を渡しをやく城をおよさるは
一戦さくしと云送る一益吾信長の命を受関東の要領
きりり今危し修て何ぞ小條が下知し付べきやとて兵隊
出せりともいふ

北條氏直果して小田原より兵を起し武州児玉郡本庄より
先陣の小条安房守氏邦赤奈川より孝以一益八川
を後小川に戦ふ大敵支がごとく討つる者多し一益厩橋小
帰す其日討死せし人々此姓名を過去帳に書て黄泉を添
寺に送りて供養し諸將をあつた暇乞として酒宴し一益
鼓をうち兵の交りおぼゆる中のごとくいひければ倉賀野淡
路守たごり今八と唱へりしをや終夜酌酔て太刀刀
取出し上州の諸將より引出物より懇々喉を乞て六月二十日
厩橋を打出各人質を帰しきれども皆請取むる
駒馬木の事沙汰し乞を送りて笛吹嶺に至る時國人は
人質悉く帰し木曾路より帰京に滝川辰次郎ハ一益が
八丸を奪ひしごとく一益と同く長嶋に帰る

長男三九郎二男八丸を討ひ木曾路よかゝる時一揆起し八
丸を奪ひしごとく一益が士古市九多衛一揆を退拂ひ
一説赤奈川の合戦より八丸生捕まりしを古市追討し甚
敵を切あせ八丸を奪ひきて連ねしごとく一益が
平右衛門津田治右衛門あつた苗を討死し其間より一
益兵を納め厩橋をめぐりし一益が
武功及ぶよ及て士大将となり武者奉行し又酒宴
と倉賀野よりの事ともいひしごとく
関東より一益厩橋を引くはひしごとくぬるすはひ討し賞美

しつとせ

○天正十年五月廿八日光秀愛宕山の西坊より百護の連歌

とれたる今あえが下りる六月のれ 光秀

あ上まはるる夜のたつらふ 西坊

花あつたなだれのあをせきよめて 紹巴

明智本姓土岐氏あれば時と土岐とよみを通りて天下を
光の意を合ふり秀吉既よ光秀討つ後連哥を聞
大に怒り紹巴を呼天が下あるといつ時ハ天下を奪ふ
のんあつたにまつり汝あつたさうやと責らるる紹巴其發
句ハ天が下あるといつとあつたば懐紙を見よとて愛

岩山よりなまなく見ろ小天が下りるとあつり 紹巴涙

を流して是を見ろ懐紙を削て天が下あるとま換

跡分ぬたうとやまみれなも書かぬとて秀吉

罪をゆるされたり 江村鶴松等把きてあえが下りると

おとこどもも光秀討つて後紹巴密に西坊に心を合せて

削く又始のびしつとあつたと書きつりたり

○織田信孝秀吉と弓箭をとり時信孝の乳此人を人貨

小秀吉のゆりよと出で置ましつとを磔せしめ誅せしめかの

乳の人此子ハ幸田彦右衛門とて信孝此士大將なり是

より前秀吉信孝此長官ホをかくらるる小園奉下地ち

ハ同ふし信孝は背きられども幸田ハ背くは幸田が母誅

せしむる不及て子の妾を娶りし書を送りて我今空しく成るゆめ歎くべし親ハ必子に先づ習ひたり唯忠義を守りて君よな背れぬと云ふに聞人感ずりて天正十一年四月十八日秀吉の先陣佐孝地を責入る時幸田兄弟いさぎよく討死しり幸田が母ハ実ハ漢の王陵が母也志とも云つたり但し王陵が母ハ天下を志すべし高祖の事を識れども只今危難に迫まる織田家は忠を盡せしむる真ありがごとく死するあり

○佐久間玄蕃盛政柳瀬まで中川清秀を討取らるる時秀吉長濱より一騎がけ来て来らるる志津が嶽より

到まば日暮ぬ陣の相去る事二里計なり盛政使を以て早くも軍を寄られぬお待てぬと夜明ハ矢合仕りぞいと我言送りし秀吉少して是より申さんといくもあつた明日いさだよく軍をとげぬべしとて使を返して後吾も怠らせ夜討せんとは事なり遠き異國の張良ハ志し我を誅すべし者日本ハ有りとハ覺えんとて野も山もかりを透るなく焚く白日の如し佐久間ハ敵人馬の行程を急て疲まらる処へと押し寄せ打破らんとおもひりり秀吉の謀ハ夜討の支度なくみりり

○志津が嶽の合戦又堀久太郎秀政兵を合ち出さんとす

時其^{ツクシ}於^ニ堀七郎兵衛^{オシトメ}押留^{オシトメ}て曰^{イハ}勝家^{カツカ}の陣^{アレイ}より佐久間^{サクマ}陣^{アレイ}
は頻^{シバシバ}と使^{ツカ}来^キると又^{マタ}西^ニ疾^{トク}引^{ヒキ}とれと此^{コノ}事^{コト}な^ルむ若^{ニシ}引^{ヒキ}取^テハ
玄蕃^{ゲンバ}の道^{ミチ}をバ帰^{カヘ}るべ^クと^シバ近^{チカ}き^カ戦^{タケ}ハ
有^レべ^ク玄蕃^{ゲンバ}引^キ取^テハ勝家^{カツカ}必^{カナラ}来^キて軍^{イクサ}は^シ此^{コノ}二^ニツ^ツを
出^デべ^クと^シ兵^{ヘイ}を^ツか^カと^シ待^{マツ}た^リと^シ玄蕃^{ゲンバ}も退^ヒき
柴田^{シバタ}も進^スざ^リと^シ勝家^{カツカ}運^{ウツ}兵^{ヘイ}と^シ果^クて
敗^イ北^{キタ}と^シ又^{マタ}志津^{シヅ}が嶽^{ツツ}の事^{コト}を老^{ラウ}功^{コウ}の人^{ヒト}は問^トは^シ勝家^{カツカ}
此^{コノ}詞^{コト}の^ウこ^トこ^ト玄蕃^{ゲンバ}引^キ取^テハ勝利^{シヨウリ}を全^{ソク}く^シと^シ玄蕃^{ゲンバ}言^{コト}
のめ^ク孫^{ソノ}孫^{ソノ}押^{オシ}詰^{ツメ}来^キら^バ必^{カナラ}軍^{イクサ}す^ムじ^タあり^ニ両^{リウ}将^{シャウ}互^ニ
に^シ勝^{カチ}を^ツ失^{バシ}ひ^タと^シか^クと^シる^ル
○志津^{シヅ}が嶽^{ツツ}に^テ佐久間^{サクマ}が^ニ人^{ヒト}数^{カズ}乱^{マシ}る^ベを^シ秀吉^{ヒデヨシ}告^ツげ^テ近^{チカ}習^シは

人^{ヒト}々^々よ向^{ムカ}て爰^{ココ}ぞ鎧^{ヤリ}を合^{アヒ}せよと詞^{コト}を懸^{カケ}ら^レば各^{オノ}競^ケひ
進^スむ福^{フク}島^{シマ}市^シ松^{マツ}加^カ藤^{フジ}虎^コ之^ノ外^ノ加^カ藤^{フジ}孫^{ソノ}六^{ロク}郎^{ロウ}片^{カタ}桐^{キリ}助^{スケ}作^{サク}平^{ヘイ}燈^テ
檀^{タン}平^{ヘイ}脇^{ワキ}坂^{サカ}甚^シ内^{ウチ}槽^{カス}谷^ヤ助^{スケ}右^{ミダ}衛^ヱ門^{モン}七^{シチ}人^{ヒト}あり^ニ秀吉^{ヒデヨシ}今^{イマ}
日^ヒの七^{シチ}本^{ホン}鎧^{ヤリ}此^{コノ}者^{モノ}と^シ呼^{ヨバ}ば^モ誰^{タレ}と^シ事^{コト}を^シ知^チら^ズ
其^{ソノ}時^{トキ}指^{サシ}を折^{オリ}てか^クと^シられ^ルる^ル前^{マヘ}に^テ進^スむ^ル事^{コト}あり^ニ是^{コノ}時^{トキ}
志津^{シヅ}が嶽^{ツツ}の七^{シチ}本^{ホン}鎧^{ヤリ}と^シ世^ヨに^テ唱^{ナゲ}へ^タり^ニ中^{ナカ}へ^テも^モ福^{フク}嶋^{シマ}を^シ進^ス
て鎧^{ヤリ}を合^{アヒ}せ^タと^シ上^{ウヘ}首^{ノビ}を^ツな^ギり^タと^シ六^{ロク}五^ゴ千^{セン}石^{シヤク}あり^ニと^シられ^タ
其^{ソノ}餘^{ヨリ}ハ皆^{みな}三^{サン}千^{セン}石^{シヤク}と^シら^レぬ^ル福^{フク}島^{シマ}ハ紙^{カミ}の切^キ裂^レ志^シの指^{サシ}物^{モノ}
加^カ藤^{フジ}嘉^カ明^{メイ}ハ紫^{ムラサキ}ち^チろ^ロ清^{キヨ}正^{マサ}と^シ紙^{カミ}ハ志^シで^テ馬^{ウマ}ま^まん^ん片^{カタ}桐^{キリ}ハ銀^{ギン}乃^ノ
切^キ裂^レえ^タと^シ平^{ヘイ}野^ノハ紙^{カミ}子^コの羽^ハ織^{オリ}槽^{カス}谷^ヤハ金^{キン}の角^{ツノ}取^{トリ}紙^{カミ}のえ
づ^づ此^{コノ}指^{サシ}物^{モノ}さ^され^タと^シ我^ワぞ

○志津が嶽の前夜石川兵助と福島市松と口藩一既刺
 違ふべき体ありしを座より西明日の軍は身を捨
 て高名を遂らるべきことはいくある事ごとく押留られ
 石川面々のあまそ口も侍ぬぎる市松何とてこそは鎧先
 に向ふべき明日は後影を見よかると云捨て出づるが
 直に柳瀬と趣て只一人真先より死に付死に付りて
 其の勇氣はいくらもなれども怒りハ戒と云へといひ
 あつり秀吉石川が弟長松と感状を与へらるる其の文曰
 今度三七度依違貳軍美濃大垣に柴田修理亮
 家出強柳濃欲逐一戦之時兄兵助先赴合鎗令殺死
 拔群之擧也動發於眼前見之尔雖為若輩念兵助之

壯志与秩千石向後愈可抽忠節者也

天正十一年七月五日 秀吉

石川長松及

とがしつとつり
 ○志津が嶽に軍破まで佐久間を生捕来り秀吉見て汝
 ハ武勇逞し記者を助て國を与ふべし二心なきんや
 と向ふ我身の上はめくせん新に恩を受るるも柴田を忘れ
 んやといふ死すべし及て大改紅裡廣袖の小袖白帷子小
 是一つは金なりと云へば秀吉其屑と云せり

くバ大に悦んで是を忌むるなり
人々をみあへり

柴田亡て後其従子佐久間久右衛門安次源六郎實政
兄弟紀州に遁まき粉川法師三池をかくし河内雲
坂の城を據へ後亦南河内天野山の國見を要害しして
度々軍しつゝ遂に秀吉小攻落さる後小田原に
入小條亡て兄弟金沢の称名寺にありと秀吉傳へて
伯父勝家の為を吾を仇とす志誅は大丈夫といふ
に今日日本平均にぬきバ心を改めよとして安次は方
五千石実改は一万石与へて蒲生氏郷小附らる兄弟
氏々は一禮しつゝ時蹟まゝを人皆笑しつゝは氏々

物の思慮なく汝が奉公ぶりを彼に競ふる事よ
兄弟とも其後の士よあはれざる物をと云まはり

○尼子家十勇士と世に唱へるハ山中廉之介救原茨之介
五月子苗之介上田稻葉之介尤道理之介早川船之介川岸
柳之介井筒女之介阿波鳴戸之介破骨障子之介あり

○秀吉信雄を赤亡さんと謀て先伝雄の長兄岡田長門も津川
玄蕃浅井田宮丸籠川三郎を傷をうけ死に懸よりあはて
後信雄よ自害をすめよけりバ懸賞あつて行ふべしと
傳へるなりや入むハ首を刎ん事を乞ふ上神文を書くと
奏らる四人力あく兼てあて起請文をすふり秀
吉も約を背くと神文を出されり是ハ一人づかゝらる

へきをイチドウ一回招ニネきしるハ信雄シノニ告知ツケレらす者シノきて誅シノせざるを既スデに
誅シノせざるのカク謀カクあり又皆秀吉シノニ実シノニ心服シノせざるとも既スデに
神文シノを書キしを疑カクひく一和イツクと思慮シノせしむる
あゝなタキカバ滝川素僧モトソウあり一シノ信長シノ呼出コビイカし四万石の地を
賜タマふシノ身シノなればカク長門カクに帰カクて信雄シノスカクと告ツケげシノせばヤガ頓ヤガて三人を
誅シノせんシノとく長門シノハ飯田イヒダ半シノ之シノ勢シノ玄蕃シノハ土方ヒナカタ勘シノ之シノ清田シノ宮丸シノと
森源三郎シノと討ウチ手テを定シノめシノられシノるシノハ土方ヒナカタ兼シノ之シノ長門シノを六臣シノ
ニ仰セ付ケしシノしシノハ打田ウチノ中シノとシノいシノふ飯田イヒダ既シノニ定シノアシノしシノるシノハ
何シノの中シノ条シノ此シノあシノるシノべきシノぞシノとシノいシノふ信雄シノさシノるシノハ長門シノをシノ土方ヒナカタ討シノ
ハ飯田シノハ既シノニ下知シノしシノればシノ討シノしシノるシノハ同シノとシノいシノふ長門シノをシノ土方ヒナカタニ
讓シノアシノりシノ土方ヒナカタが斯シノ云シノふシノ故シノありシノ土方ヒナカタハ始シノ彦三郎シノと云シノるシノ

かぬシノくシノ遅シノくシノ胸シノよりシノはシノ是シノふシノ事シノもシノ毛シノ甘シノ熊シノのシノぬシノくシノそ
勇猛シノの士シノ長門シノ常シノ小土方シノは倍シノアシノて殿シノハ人シノけシノすシノるシノ輕シノくシノく
信シノぜシノれて日比シノ我シノをシノ疎シノあシノくシノよシノと度シノくシノ云シノるシノをシノ土方シノ夫シノハたシノえ
ふれシノくシノ又シノハ汝シノの心シノ此シノ遠シノくシノなシノるシノとシノいシノふ長門シノをシノくシノはシノ長門
をシノばシノ必シノ誅シノせシノるシノべシノしシノ其シノ時シノ汝シノ討シノ手シノありシノべきシノよシノたシノやすシノくシノ討シノむシノべシノた
身シノよりシノどシノとシノいシノふ土方シノ関シノて討シノ手シノの仰シノをシノ奉シノらんシノとシノいシノふ此シノ効シノをシノ衆
たシノくシノで又シノ誰シノもシノなシノらシノずシノとシノいシノふ長門シノ仰シノをシノ考シノてシノはシノ七シノ胸
切シノ落シノしシノるシノ脇シノ指シノはシノて汝シノが頭シノを斬シノ破シノんと云シノるシノ初シノにシノ依シノるシノ
初シノハシノ中シノせシノるシノ天正十二年三月三日の禮シノニシノ岡田シノ信雄シノのシノあ
ふ出シノるシノを相シノ圖シノとせシノられシノるシノハ岡田シノ廿日シノハシノ狼シノ差シノをシノ横シノ寺シノへシノて
進シノむシノ知シノるシノ信雄シノ射シノと造シノらせシノるシノ鉄炮シノをシノ見シノよシノとシノて指シノ出シノしシノ此

墓尻の穴ハ何の為ぞと問ふ小園田ヤ一答つむく時土方
つとを引組じり園田已をやとりのあまに狼牙を七八寸抽
くましても大力強く抱くまて抽もされまて秘ぢ合ひぬ
を信雄土方放せ我自ら切んと詞を懸らまつて又臣と昔よ
斬せまてとそれされ信雄放されまてまても斬せまてと
まつりば土方園田を突まぬがはる小照差を抽て指通せ
バ信雄すうさば切て殺されまて津川ハ此強きをすて走
来アまが信雄小行急刀をえ延て切まて廊下の長
押小切付まて飯田傍より刺殺まもり浅井をば森林付
まて是よりして秀春と弓等をまてまて

○平松金次郎重之甲州の温井と回どく天龍川を渡り平松

先まて陸上上カ船に残まて後者温井に毎礼の事まて
忽ち切殺まて平松に斯まてまてまてまて
毎禮する者ハ吾も捨置まて色も変せぬ人これ平松を
誂まてまて幾程まて長久手此軍小平松と鳥井金次
郎と先を争まて鎗を合は平松が相まハ森武藏守長可
の士山田八右衛門と始播州三木の城主別所長治ま仕へ
名高た勇士あり平松肥まて小男ありまて
東照宮まてまてまて不自由なまて常小笑マセまて
小其日津前まて進まて不行歩者今日鎗を合せていとまて
らまて傍若無人のまて賞せまてまて不
おのひまて前田利家まて士山田出羽守時平一帯まて秀次

又仕へし秀次より一萬石は禄よりさゆゆれ々々平松は
小幼一京は趣く時心易き朋友と暇をいして立去りしを
字一召退く討手を出させよ大剛の平松をいばとて第一
番小渡邊半花淡て河村善七郎大久保与一郎坂部治守衛
段く追々けく坂部袋井とて平松ハ久能へ移り坂部越小
遠州可睡齋の禪寺立寄と物傳と坂部ハ兄三十郎は用
の事有て横須賀へ移りて打連とて道の別際とて久く
を馬より下り暇をすす坂部中松を一太刀斬りしふ
いふとてさうせん切らざらんまは平松坂部が眉間を切坂部眩
くれどもさうその者もく落人あり坂部よと呼はるるを
近所の郷民群と知るよより平松可睡齋へ入るるを取曲る

横須賀よりも池集や寺をたむきまきまも平松ハ爰小居る
むとといふを小僧を捕りて責問すより平松何方へも逃る
者よあむとまよ腹切んとて立出坂部三十郎は向ひ治
兵衛ハ其の親しく語りまればも不便なからむよか火
を拂ひて是非なく切らざらん三十郎は治守衛を
浅く答ふ平松吾斬り御を助るべきや目比の交り
とて丸ハ刺ざりさといふ腹切とて三十郎ハ錯せんと
まがら平松治守衛を吾もふかけ今汝も首を討まんハ心よ
うとていともく同心をさうりしとてさうり

又一説小平太ハなぐ口論の時後まを殊と遠州杉井の
渡里舟より相系杉五郎平松が後者を討つるふとあり

とくして有れば人々嘍笑ふ 東照宮は召人ハ何とも
いへ平松が眼ざう剛の者なりと仰らまうが呆けて長久
手まで驚り兼々平松苗の羽織を名十文字に
鎗を提すみ出池田家の軍兵共中よ陰を入り
其後出仕の中より諸士は向ひ吾胎内より厚恩を懐み
ごうふ一命を捨てと思ひしが今ハ子思ひおぼるは
誰れもわかれは梅切よまじし昔の金次郎とも思え
まこそ妹おあはれ若くはと大言一々一人も養ふ
る者なり平松が勇名高く多えて先年天王寺勝曼は
鎗貝殻塚の鎗備前八濱の鎗をとり言傳えこれ平
松が鎗ハよきとせられり世の人賞りり秀次一カ

石うて招きまうらば平松立退るをすし小栗又市
渡色中藏河村若七郎坂部治三郎を退り出させし
園崎へ早飛脚来て本多作左衛門も清平松終
小袋井此小可睡斎より自害せしり
○長久手此軍小水野忠重の嫡子勝成ハ目を病て曹を
鉢巻しころろを父見て汝が曹ハゆをり壺小志しと
罵らまうらば父あざうけりの詞うぬ真先かけて首を取
吾首を敵よころろ二ツの中よといまう馬引きて打
棄りら鎗をあてかけぬ忠重あれハいうまう太田重助
とりし士をこぞ呼帰されし事耳も夢入も又水野
喜右衛門をせ来りしめんを掃茶をこぞ観て

上の誨ハ字も入べし只今大軍中よかけ入功名せん時止ま
とて引返さねばやるといひすて秀次の将白井備後ちが
陣小突てかゝり曹をとりてせ帰る此日の一番番首なり
勝成あゝ若くて人を物ともせぬ忠重の心は忤ひ虚無僧と
たかりて國々をめぐりて武者修徳も後よ忠重死して
東照宮勝成よ三州荊屋を賜り日向ちと称して大坂の時
大和口の先陣とて大功あり人なり徳米十方石を賜ひ
て後愈士よ下りて身をいやくしてとてと士よ忠義を
とめし主君とたかり後者とあり互に頼りあひてこそ世に
つ習ひあまされれば大事の時ハ身をすて忠義をたて
そがし汝木我をば親と名をれば我汝を子をと思ふんと

常よ士よいよとて年老て鷹野ふゆ時行歩かあらず
蒲園よのりて士よかまき士番所よハふんたよ下に
居て年老ての鷹野をうてて鳥をうん為にけり
心ありての事れりと度くいひて打過られきり或時鷹野の
所よ昔勝成よ仕へし士を見けいふたやや我方
て禄三百石なりし立去り越前よ千石は禄とや今爰
よ来らまうハいよよと向ふ彼士仰の通禄ハ越前よ増へ
ども殿の下をいさなり懇よりてなりやなと禄よ
換てて暇乞うてゆりぬぬと申さば徳米大よ悦び折よ
ふま思ひおせりて即日小禄を増えへらまうその
後勝成隠居し又鷹野の時彼士は家の門閉するを足て

いふと向ふに義作守の心は背く事ありて暇を乞ふ走りぬ
と答へてバ彼者ハ越前の禄千石を捨てる小禄の我家を志
しひく帰る者ありふ作州ハ思へるやかくり勝成
し若た時を得て武藏に金川根世流の弟子となり尺八
一本携へて虚無僧となりて日本國をめぐり或時ハ堂塔
夜を明し或時ハ野も山も目を養ひ極く小艱難あり
人よも離れられ一言虚無をいふ事なく不仁のあつひせ
ざりしを今福山十方石を賜りぬ然まじも下の情状
あつるハこれ虚無僧なり故たりと云ふも惜むべき士
を失ひぬるよ美作ハ下は事ハあつれぬぞう一はさべてよ
士ハ主君又ハ頭の下志をも無理ある事ハ心服せらるる少の
泣きもくるとりや

○東照宮小牧陣しつかりやせしが秀吉兵を分ち中入
はとせし召敵の迹は後うて向をせし小牧は石川伯耆守
数正酒井左衛門尉忠次本多平八郎忠勝を擁せし正然
るよ秀吉大軍を叩いて長久も向をしるるを見て次ハ
秀吉の本陣楽田へ押寄火をかけし攻撃をべしと云れども
石川秀吉は後變有とすて弥怒りなると強て押へて止
まらり忠勝ハ秀吉の馬志しを見るより僅よ五百計引
具し小牧をかゆ小川一筋隔て秀吉はおちび長久

怖して死向ふ路少く足輕を進め鉄炮を打ちけ一軍せん
とすれども秀吉又さる体もくゑ合点龍泉寺の前にて忠
勝馬を川より入口を洗ふ秀吉川の鹿角乃立物の曹を
着くハ大將と誰を見知くると問く小稲葉伊豫守道長也
一年姉川の軍ふ武者出立見えては本多平八郎とてはとん
もあぬよ秀吉涙をもちりくと流し五百よ足らぬ士卒を
めて吾八萬此軍よかけ合さんとす千死小一生もさるだじ
御ふ道を際どくせ已が主君の軍よ勝利あせんとの志
勇と云忠と云殊よ類も死本多うれ秀吉運強く八軍よかえ
あくく考を討べくくはくく弓鉄炮を制せられを欺て若
勝長久手ふ馳付きれば軍終て敵味方ともふんをばこハい

くふとりつら味方打捕小畑よ入せありと笑ゆかよりんで
追付なり津馬の例よ辛や考云ぐひあも小畑よ捨させろひ
かゝる軍よ合不中と申されハ聞し召取あへば汝が躬ハ我身を
とておひひく小畑よあ後ハ危きるたうくそ軍よは
勝きんと仰ありと其後天正十八年秀吉北條を打亡し七月
廿六日野州守津宮よて平八を呼またり忠勝ハ下総の廳南小
有るるが急ぎ来る秀吉諸大将並居きり中よ呼出熊野
よりの佐藤四郎忠信が曹を得させく考も四郎が忠義後世
やまぐ語傳ふ四郎よ芳らぬ人よ忌ませるとやりの誰うもと
いせましふ答ふ人なり其時秀吉四郎ふよされる者ハ平八
あり子細ハ志うと長久手の軍物ぐら忠勝の有様

審ふまゝにて則曹を忍傷不賜タレアられバ忠勝面目身メシホクミあり
分地コノチし々々知れり不其晚又忠勝を招き傍カタヘの人を遠ざけ自
茶チヤを与へりいづも諸大将並居ナニキし中ナカも汝が武勇を
褒奉ホメアゲしハ秀吉が恩オンたつとや主君の恩オンといふ事と問
ふ首カズを低タレく物モノも頻ヒシよとそれとてバ忠勝兼ツカサて汝ニは
しハヤせざらん累世レイセイの主君ニクニ此恩オンとなつてはア非アラざるやと
まうしうば秀吉愈感イユクカンせられり

一説タテマテは忠信乃曹カトを賜タレりりも悦ヨロぶ色イロありいづちと
まへバのやとよ忠信武勇タテマテさのみウラヤニ次ツギしもさう主君ニクニと仰
ぎ九郎判官ハタケノシも吾爵位ワカシヤクキも同ドウト唯世タニヨの家イヘは傳ツタへる廉
角ツノの曹カトこそよかれとまうしうとて後忠信ノチタテマテの曹カトハ二男忠

朝トモ不ユキ壊クサと廉角ハシノツノの曹カトハ嫡子チヤクシ忠政タテマテは懐ユキらまきさうりさタテマテ也
おりしややうりらん其曹カト小志コシも付ツキぎしと並ナリれしとぞ

○小牧陣コニキチンの時サカキバラヤスニサ神原康政秀吉ツリ此事コトを諫ツツて札ツカ書カキ織田家オリダノケに向ムひ
て弓ユミを引ヒキ事コト不義フギ惡逆アクギヤウの至イタりたりと出イデて所トコロと立タテたるを
秀吉齒嚙ハガミしていづと康政ヤスニサが首クビをらん者モノハ十萬石マンマンイシの地チを
与へんとぞ觸フレらまきら其後トシメウ 東照宮トウシャウミヤと和平ワヘイして婚姻コンインの
約ヤクありたり始ハジメの使ツカヒは康政ヤスニサを賜タレはるべしと秀吉ユキやされて京小
上ウヘりし秀吉對面タイメンし小牧コニキを立ツテて時トキ汝ニカが惡ワルき首クビ
を一目ヒトメらん事をコトのぞみひし今イマ期カク和睦ワボク及カヨべむ其志シを悦ヨロ
び思オモふあり此事コトを直ナキよんが為タメに迎ムカへしり小平太コヘイと呼ヨバ
んハいづり叙爵シヨク然シカるべしとて式部シキブ大輔ダイボとハ此時コトキよりぞ

○尾州蟹江は瀧川一益中入まると告来り時祐筆が道とりは若
清出馬して成者也と云々を
東照宮此可の字を削り今
日お於て六一字も大坊之大敵を前よ置可出るとおされり
出馬するると其時をぬきさぬこと仰られり

○東照宮長久手の軍は備せし勢州蟹江の城前田與十郎
を攻めあつんとて打向いせしゆわくか勢多く池入りしを
後して敵いりあつても城中へ入よと仰らるしを酒井左衛尉
忠次兼て何とて押苗多らぬぞやと申渡
東照宮いづよ
そと清尋ありしは忠次城ハ堅固なり多勢ありたるは
争う攻落さるべきいりあつしゆわくゆいしゆわくを定召大将謀を
やしやると仰られり其後援兵の集来りしゆわく船を退拂

ヲセ糧道を絶せしゆわく糧忽急しく成て城を渡り降参りたり

東照宮四十二才の時時たりしや

○燹江より井伊直政兵をまらむ秀吉の舟大將九鬼大隅守
嘉隆日本丸とり大船よ系燹江の湊小漕入て打上り堤を隔
て戦ふんとせしが引退て船よ棄るるとり入江の湊よ
東照宮此兵船角新造といふを横根よりて左右に乱株をうち
まのち取囲んとし直政ハ追かき九鬼が若世多く討て水主
楯を破り騒ぎて船を出し得むかき九鬼が士村田七兵衛
鉄炮よ茶を込間宮造酒亮が船先よて下知りしゆわく大喜上
て静よ相争ひたりしゆわくを両軍たりしを静めて見物しゆわく申
よ九鬼が若世ひひしゆわく船よ棄組りしハ村田が船を捨てしゆわく

多ん為の謀由あるり形て村田かりの矢坪に中アて万文信
まうらバ九鬼が若力を得流炮を打ちけ船を乗浮めく湊
を出よるやと

○秀吉小牧陣をわたり紀州の根来雜賀此一揆を押へんよ
中村式部少輔一氏を岸和田に城を置き紀州の一揆秀
吉大坂を打立とつて二万三千計二島分まき一手八束の山際
より坂を向ひ一平八塚和田に押寄るも中権の若者ども二騎
三騎城をわく寄手小向ひしは士大将早川助右衛門川毛
惣左衛門引帯まで使をやをを一氏せてかゝる時進でむき
し武者を引んとすも六敗北しものよいざ打出んとて鉄蓋
が峯と名付し曹の錯をノ城を乗出り先に進んぶる若た

菱笠の馬印をみりかへり見てはさや殿とて出あ軍八勝るよ
と云征ころあれ一万餘の紀州勢の面もみり切掛り打破て
七筋よ分て逃るを追ふ一氏ハ三百計して堂の池といふ所よ扣て
先陣のゆゑを待てし坂海をさして煙くくうらんをハ坂の向
ひく敵の返し来まらる荒手の大軍よかけ合て戦ん事おひ
もよび疾城に楯籠らんと口くしりバ一氏りやく退あるハ
味方氣挫て打負なん一寸も退く時ハ先陣を捨殺し城をも
攻落さるべし一揆ハ何百萬もあれ先陣をさして切崩さるるハ
二陣ハ忽放れさるる我に任せよと敵の一回おかりが地
乃理を料り堂の池を前よりく大敵を待まらる一氏馬を
け悉く城へ返らん馬を引付て時ハ引退たさるの起るごと

席を立つるやあるといふらまじきなり

○稲葉治左衛門ハ美濃齋藤家の士戦場よて必す先ノ独
進ニ出テ芒の如くある下ニ居テ居世此人を芒の治左衛門
と云々澤喜藏ハ美濃飛弾ヲ隠ミテ若シ頃より
功名有キ芋がら畠の鎗沢一番なりと云々吾ハ何れ
稲葉ふなりと云テ互ニ譲リテ決セバ澤ハ吾早ク進ミ
半々も稲葉がほらの身を志むる像ノ先ノ乗込より
實ハ一番稲葉ふなりといふ人皆是を賞シテ有テ武
足輕鉄炮ノ鎗を拵テ鉄炮を拵テ上ノ鎗を合セ
ガ吾一番よりさず園部儀大夫がほらの身を志むるを
証出ぬ字を於テ一番ニ譲リ〜と同事よて戦はよか

士ハ中れなる事ハこれ

○羽柴下総守勝雅の許ニ二藏三藏とて物〜といづまこの
城〜の事ヨヤズ下総守城より出テ働キ引テ〜城
敵付来ルニ二藏三藏門を固メテ揚箕戸を下〜敵をたて
〜免〜勝雅下知〜門を叩ク敵二人を出〜討テ
近藤石見守加勢〜ガ女子細を問キ〜ハ
死地ノ入〜敵ヲ討テ是を討テ城兵皆死傷ス〜打
キ〜軍の備敗ニあづ〜答フ石見守武功此
人あり〜大ニ賞ト〜

早稲田大学図書館

011688998117